

マザーレイクフォーラムびわコミ会議において提示されたマザーレイク21計画(第2期)の評価結果(第4~6回)

これまでのびわコミ会議(第2部)において各テーブルから提出された「振り返りシート」を元に、マザーレイク21計画(第2期)の評価結果を項目別にまとめました。2020年度以降の計画見直し等への活用について検討していきます。

3章 2 暮らしと湖の関わりの再生

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
1	各地区では意識の高い住民によって生態系保全活動が実施されている。今回のテーブル参加者の例でいえば、家棟川を見直す動き(NPO法人家棟川流域観光船)や水田に生き物のにぎわいを取り戻す動き(小佐治環境保全部会)が活動を行っている。	シチズンサイエンス(市民参加型科学)の活発化がのぞまれる。そのためには上記のような各地域で行われている個別的な活動の成果をオープンにすることで各活動が活性化されるだけでなく、琵琶湖の保全活動にも幅と深みが増すものと考えられる。	「楽しみ」や「遊び」で琵琶湖に関わっているひと(遊漁、鳥の観察、湖水浴など)も多いと思われるが、統計値から漏れているものが多い。魚でいえば、漁獲量だけでは資源を正確に評価できない。市民団体の活動の契機は、「楽しみ」や「遊び」の延長や発展ではないかと考える。こうした人々の「楽しみ」を増やすことがさらに琵琶湖をよくすると考える。	8. 語り合おう! 野洲川流域の人と自然のつながり	地球研栄養循環プロジェクト	第5回

4章 3 計画目標

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
1	各地域フォーラムやネットワーク団体における地域内外の交流・つながり・協働	各地域フォーラムとうにおける地域内外の現在の交流・つながり・協働から、琵琶湖流域全体のことを念頭においた活動への発展	つながりを支援するつなぎ役の存在と役割について	9. 川と人、人と人をつなぐ地域活動について	淀納所桂川愛護会 河川レンジャー(淀川・琵琶湖)	第4回

5章 指標

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
1	・多様な主体が話し合う場づくり(マザーレイクフォーラム、びわコミ会議など) ・「近い水」のある暮らしの再生に向けた各種取組(環境学習の推進、農林水産業の活性化など)	・取組が県全体で見ればまだまだ一部にとどまっていること。石けん運動のような県民総ぐるみの取組にどのように発展させていけばよいのか?	科学的、客観的なデータを総合的にまとめていく努力はなされているが、一方で人の感覚に関する検討はほとんどなされていない。例えば、CODやTN、TP、(沖帯の)透明度で表される水質の状態と、人が感じる水の善し悪しとは、必ずしも一致しない。その違いにこそ問題の本質があるのでないだろうか。人が琵琶湖をどう感じているかという主観的な指標も、数多く集めることで琵琶湖の別の側面が見えてくるのではないのか。	12. 琵琶湖の「いいね!」を何で測るか? ~『琵琶湖と暮らし2016』をもとに~	琵琶湖環境科学研究センター	第6回
2		今の子どもが現在の琵琶湖を「きれいだ」と言うのが心配。現場(琵琶湖)を見てもらうことを大切にしたい。漁師を通して環境学習。	行政や研究所での資料には現場の声や現場の状態は載っていない。	14. 琵琶湖の守り人	沖島町離島振興推進協議会	第6回

7章 1 「近い水」のある暮らし再生プロジェクト

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
1	「近江水の宝」調査活用に関する事業 http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/sogo/kakuka/ma07/treasure_of_water/	地域を代表する名勝・古利レベルの有名な「宝」に関しては、その選定に多くの人が賛成すると思います。今回の話し合いででてきた宝は、このような有名な宝も含まれますが、一方で個人の体験にもとづいたより小さなスケールでの宝や無名の宝も入っています。後者の宝をどう伝えて守っていくかが今後の課題ではないでしょうか。		4. 教えて! あなたのまのタカラモノ	地球研栄養循環プロジェクト	第4回
2	p.40、4行目 琵琶湖に感謝する「飲水思源」については、近畿の水瓶として認識されている。		・「内容・主な施策(p.40)」に「県域を越えた流域連携事業」の記載が必要 例: グランドの助成金など、上下流連携の事業に対する支援 例: 指標として、マザーレイク・淡海の川づくりフォーラムへの他府県団体の参加数	6. 琵琶湖・淀川水系での上流と下流が つながるには?	NPO法人 蒲生野考現倶楽部 琵琶湖・淀川流域圏連携交流会	第4回
3	P40、4行目 琵琶湖に感謝する「飲水思源」については、近畿の水瓶として認識されている。	・飲み水、生き物、食べ物、災害などで上下流(流域)は繋がっているが、そのことに気づく仕掛けがない。 ・びわ湖や滋賀の魅力の発信がまだ不十分	琵琶湖の魅力の発信や、様々な取組みに関する発信の記載が不十分。また、特に琵琶湖の課題が、下流域に知られていない。	3. つながるための方法を考えよう ~市民レベルでどうつながるか~	NPO法人こどもアート(琵琶湖・淀川流域圏連携交流会)	第5回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
4	日本一の琵琶湖の水質が改善し、景色が良くなっていること。 琵琶湖の周りのサイクリングや、琵琶湖での水泳などで、運動と琵琶湖が繋がっていること。	より水質を改善させ、更に素敵な景観を取り戻すこと。 最も琵琶湖を体験できる琵琶湖沿いを歩くということを広めていくこと。		11. 体験で得られる5つのK ～健康・環境・観光・啓発・感動～	(株)エフアイ びわ湖チャリティー 100km歩行大会	第5回
5	マザーレイク21計画の「つながりへの配慮」にかかる成果指標の一つ「自分の住む地域の洪水ハザードマップを知っている人の割合 H32年100%」にむけ、H26年3月に制定した流域治水条例において、宅地建物取引時に水害リスク情報を取引の相手側に提供するよう努力義務規定を設置した。	水の楽しさと怖さの両方の性格を県民の皆さんに知ってもらい、「近い水」を実現するために、環境活動と治水・防災活動を結び付けていく必要がある。	都市計画・まちづくり(人がどこに住むのか)に関することが記載されていない。	12. どうやって水害から命や財産を守る？	滋賀県土木交通部 流域政策局流域治水政策室	第5回
6	・県、市、集落レベルにおいて、市民参画の下、目指すべき将来社会の姿に関する議論や共有が行われている。(MLフォーラム、持続可能な滋賀社会ビジョン、東近江市環境円卓会議、高島未来円卓会議、蒲生地区まちづくり協議会など) ・農家レストラン、6次産業、農家民泊、エコツアーなど、地域の人による地域の資源を活かした仕事づくりが活発になっている。(あいとうふくしモール、高島未来円卓会議など) ・地域ぐるみでの世代間教育、環境学習、体験など、多様な学びの場がある	・目指す社会のビジョンづくりは盛んであるが、各主体が行動できるビジョンにはなっていない ・休耕地と農業参入希望者を繋ぐ公的な仕組みが必要 ・地域資源の価値の見直しが必要「ないものねだり」から「あるもの探し」へ	・モノやお金ではなく、心が豊かな社会を目指していくことが、結果的に琵琶湖の保全・再生にもつながっていくという視点が十分描かれていない。	13. 人口減少を見据えた豊かな滋賀づくりについて	滋賀県企画調整課 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター	第5回
7	「近い水」のある暮らし再生プロジェクトという意味では、抒情豊かな琵琶湖辺りの文化と自然をうたいこんだ「琵琶湖周航の歌」は、地元住民はもちろん琵琶湖に実際に触れることの少ない県外の人たちにとっても馴染みの歌である。過去100年の周航の歌をつないできた人びとの意識と伝統は大きな財産である。今、自転車やマラソンなどでの「琵琶湖一周」ピワイチのハシリがまさにボートによる琵琶湖周航＝水上ピワイチであり、これは貴重な蓄積といえる。	琵琶湖周航100年目の「なぞり周航」をきっかけにして、多様な水上スポーツの関係者、またピワイチマラソンやサイクリングなど琵琶湖一周型のスポーツを結集し、地元の人たちも巻き込んだ「県民参加の琵琶湖周航」を実現。 ・県民参加の周航実現のための熱意をもった事務局体制と組織づくり ・上記をささえるための予算と財政的措置 ・社会的発信のための戦略とその実践 ・東京オリバラの文化プログラム(文化庁)への申請戦略		6. 『琵琶湖周航の歌』100周年とこれからの琵琶湖水陸スポーツの可能性について	びわこ成蹊スポーツ大学	第6回
8	マザーレイク21計画の「近い水」のある暮らし再生プロジェクトに含まれる、『環境学習・体験・観光などの事業の充実』として小学校などでの総合学習の場などにおいて、川の怖さを伝える出前講座とともに、川の良さを伝えるための自然学習として、実際に浅い川に入って流れを体験する流れ体験や川の生きものを観察する観察会などの体験学習を取り入れている。	話合いの中で「昔は川でよく遊んだりしましたが、今では川は怖いものという印象が強くなっている」という話もあり、「近い水」のある暮らし再生プロジェクトをより進めるために、川が提供してくれる楽しい面と水害などの怖い面というものを、適切かつバランスよく知っていただく必要がある。		10. どうやって水害から命や財産を守る？	滋賀県土木交通部 流域政策局流域治水政策室	第6回
9	・環境学習など体験型学習 ・それぞれの楽しみ方での琵琶湖の活用(ただし、琵琶湖の保全への意識は不明)	・「保全に沿った活用」が、単に楽しむことや県外から人を呼び込むことと、どこが異なり、どのような視点を織り込むべきか、整理が必要。 ・県外からの利用者、県民との良好な関係を維持するための工夫。 ・琵琶湖の活用に関する全体像整理。(現状把握から)	・琵琶湖の活用について、計画では、琵琶湖から得られる恵みを扱う1次産業の姿は読み取れるが、レジャー利用などについては、色が薄いと思う。そのためか、県外の方と琵琶湖のつながりをどうするのか、が明確にされていないと思う。	11. 琵琶湖保全再生法成立～国民的資産「琵琶湖」を未来に私たちができること～	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課	第6回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
10		私たちは琵琶湖の水によって生かされているのだから、琵琶湖が人々にとって身近なもの・自分事とならないといけない。多数派が強くなるという県民性(国民性)があるが、自分が大切だと思う事を世界へ発信すべき。		15. 映画「マザーレイク」が滋賀県・琵琶湖にもたらしたものの	マザーレイクの会	第6回

7章 2 琵琶湖の生きものにぎわい再生プロジェクト

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
1	<ul style="list-style-type: none"> 水草の有効利用 水陸移行帯の保全・再生 在来生物の保全 	企業主体ということで、環境保全は景気変動に大きく左右される(利益にならないので)		5. 生物多様性に配慮した企業のCSR	湖南・甲賀環境協会/NPOびわ湖環境	第4回
2	<ul style="list-style-type: none"> 早崎内湖再生検討事業・内湖再生ビジョン 環境・生態系保全活動への支援に関する事業 豊かな生き物を育む水田づくりに関する事業 	<ul style="list-style-type: none"> 内湖再生計画地における地権者をはじめとした関係者の合意形成 内湖の役割、再生に向けた事業についての効果的な情報発信、情報交換の場づくり 今の時代に即した内湖のあり方(管理運営手法を含む)についての研究・協議 	<ul style="list-style-type: none"> 計画では、「内湖再生」とあり、内容や指標を見ると、「内湖機能の再生」を考えているようにも見えるが、計画本文ではそのような記載は見当たらない。 そのため、計画書p.44～45の記載がちぐはぐな印象を受けてしまう。 なお、今回のグループテーマは「内湖の復活について」であり、「内湖機能の再生」については議論されていないので、ご注意願いたい。 	8. 内湖の復活について	びわ湖の水と地域の環境を守る会 NPO法人棟川流域観光船	第4回
3	<ul style="list-style-type: none"> 外来水生植物の機械除去→大規模群落の減少(特に守山市) 国レベルでの取り組みについて(琵琶湖保全再生法) 	<ul style="list-style-type: none"> 外来水生植物の市ごとの意識の違い 水草が繁茂している地域ごとに処理を行うが焼却処分は市の焼却処分場で行なっていることから、外来水生植物の除去に対する意識の違いにより、受け入れていただきやすいか、しにくいかが異なっている。 外来水草の除去後の焼却処理費用の負担者について意識の違いもあるだろうが、除去を行えば行うほど焼却費用は高くなってしまふ。小さな群落であるうちに除去活動を行えば焼却費用は少なく抑えられることから、小群落のうちに除去を行おうと思うインセンティブにはなるかもしれないが、大規模群落になってしまった後は、除去を行うことをためらう原因になってしまう。 大規模除去活動後の乾燥させた水草の除去について大規模除去活動を行った後、水草を乾燥させるが、乾燥後の水草の袋詰や運搬は大規模除去時ほどの人員を割くことができず、処理が長期化することが多い。 除去後焼却処理しかできない現状について現在除去後は焼却処理しか方法がないが、除去後の水草の再利用方法を模索しなければ、多くの団体の協力が得にくい。利益や効果がでる再利用方法が見つければ、企業や団体も参加しやすくなり、活動の幅が広がることを期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 小規模群落の除去数を「水草の異常繁茂への対策」として入れる。理由としては大規模群落に成長するのを予防する事ができた成果として扱うことができる他、小規模なうちに除去を行う必要性を訴えることにも繋がるため。(P43) 内湖の利用状況について。→再生させた後、どのように利用されるのが望ましいのか記載されていても良いかもしれない。(P44) 	1. 学生とともに考える。～びわ湖の新たな脅威と未来～	NPO法人 国際ボランティア学生協会	第5回
4		現在、魚道の設置は地域共同の難しさやゆりかご米の知名度など様々な課題があり、思うように進んでいない。設置側の課題として、魚道の設置後の活動の継続や米の販売の仕方があり、この問題を解決するには魚のゆりかご水田のメリットが耕作者に理解してもらう必要がある。たとえば、ニゴロバナと米をセットで販売し相乗効果を得ることや化学肥料の減少で環境負荷の少ない米としてブランド化を進めることなど。		2. 持続可能な取り組みにするには？	須原魚のゆりかご水田協議会 滋賀県農政課	第6回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
5		ブラックバスなど趣味性が強い外来種は県外の人からバス釣りの楽しみを減らさないでくれという要望もあり、環境と観光のどちらを優先すべきか、観光で稼いでいる人をどうしたら良いのかといった、なかなか答えの出ない課題がある。		8. 琵琶湖における外来種問題をどうするか？	滋賀県自然環境保全課 IVUSA びわこ豊穡の郷	第6回

7章 3 森・川・里・湖のつながり再生プロジェクト

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
1		グループキーセンテンスで報告された「琵琶湖の環境は皆の生き方の水鏡」の通り、びわ湖に関わる地域住民全ての生活態度・意識の持ち方で琵琶湖は大きく変わる。(良い方向にも悪い方向にも)		2. 源流管理で環境いきいき琵琶湖！	白鳥川の景観を良くする会	第4回
2	汚濁水を琵琶湖にできるだけ流さないようにする(琵琶湖のリンや窒素の濃度が下がっている)。 環境こだわり農業を行い、農薬使用量を減らす。	湖や川に生息する生物の配慮を考える。 消費者と生産者との意見のやり取りの場が必要。 環境こだわり農産物を選んで購入する(してもらい)ようにする。		2. 食べることで、びわ湖を守る。 ～環境こだわり農産物～	滋賀県青年農業者クラブ連絡協議会	第5回
3	・琵琶湖流域生態系の情報収集 ・生態系保全の重要性についての情報の発信 ・ヨシ群落の再生や外来種駆除といった「自然が豊かで身近だった時代」の環境再生に向けた行政主体の取り組み	・琵琶湖や川など身の回りの自然を身近に感じるための取り組みが不十分		6. 生き物に配慮した川づくり～行政と地域社会、NPO等との連携～	古橋のオオサンショウウオを守る会 滋賀県長浜土木事務所木之本支所	第5回
4	琵琶湖がきれいになる→森を守る→森を管理する→計画的な伐採・植樹→木材を活用する→家づくりに使っていく(木造)→木材の成長に合った加工・技術→技術の継承→寿命の長い家づくり。結局、現代の短命で廃棄するサイクルの短いものは建てないほうがよい。	木材協会等、県産材の活用に力を入れているが、技術の継承にも力を入れるべきです。短命で土に返らないものは、使わないと決めたほうがよいと思う。		10. 企業よし、生きものよし、地域よし「びわ湖三方よし」に向けて何が出来るか？ +びわ湖の森をくらしの中へ	一般社団法人 滋賀グリーン購入ネットワーク事務局 A-Site	第5回
5	米原市ピワマス倶楽部や家棟川ピワマスプロジェクトなど、多様な主体が協働してピワマスの保全・再生に向けた取り組みを行う事例が出てきている。	・密漁がピワマスの数を減らす原因になっている。調査や散歩などで川に人の目が入ることで密漁をしづらい雰囲気をつくるのが大切、密猟者も仲間にしてしまうくらいの心意気が必要。 ・また新たなルールをつくり共有していくことが必要。		1. 天野川ピワマス遡上プロジェクトでつながる	米原市ピワマス倶楽部	第6回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
6		<ul style="list-style-type: none"> ・今まで人間の暮らしを支えてきた山や里が今やお荷物となっていることや山に起きている問題に対して危機感を持っている人が少ないという現実がある。この現実に対して、改善していくには中山間から問題を発信すべきであり、中山間の中の人でも外の人でも協力して考えていく必要がある。具体的な解決策として、中山間地域で再生可能エネルギーを上手に使うことや子供達に山や里とどう関わっていくかを教える環境学習を行うこと、林業で活性化を図ることなどが挙げられる。 ・今、里の人は山に関心がない、山に人が入らないようになったし、人が木を使わない。山はあつて当たり前意識があり、山の価値問題を知らない人が多い。林をうまく使うことが重要であり、単体で動くのは難しいが、そういった企業や技術が増えれば、林業に関わる若い人が増えるし、価値を見出していくことも可能である。 	中山間地域における人口減少問題について。中山間地域に人を増やす方法として、地域の1%ほどの割合の新しい世帯を毎年呼び込むことでうまくいくことが分かっている。その世帯を呼び込むためにできることとして中山間地域で暮らすことや魅力的なライフスタイルであること、その提案を行うことが考えられる。	3. 森と遊び、未来を拓く	株式会社農楽 滋賀地方自治研究センター	第6回

8章 計画の実効性の確保

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
1	琵琶湖を愛する思いを抱くことが、あるべき姿を実現するための行動につながり、ひいては、つながりを広めていくことで課題を共有することの重要性を実感していること。	関心のない人々に対して琵琶湖の現状や保全の取り組みを知ってもらい、関心を抱いてもらうこと。	琵琶湖を保全することが、自分たちにとって、日常生活のレベルでどのように目に見えるメリットがあるかということ。	1. 若い私たちの環境への思い	滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課	第4回
2	マザーレイクフォーラムの開催	<ul style="list-style-type: none"> ・下記箇所を担う人材(地域コーディネータ)の育成と、継続的雇用を保障する財源形成 「こうしたさまざまなレベルにおいて、多様な主体が参画可能な機会の提供や実践のための活動を支援する仕組みを充実するとともに、各主体間の交流を促進し、幅広い範囲で情報を共有するための機会の提供や仕組みの充実が必要となります。」(「1. 協働の視点に基づく参画・実践・交流」のリードの最終部分) ・新しい連携のあり方を構築するにあたっての行政(県・市町)の役割と規範の明確化 	<ul style="list-style-type: none"> ・目指すべき持続的な連携のビジョン ・持続的な連携構築のための戦略(人材育成と財源形成) ・マザーレイクフォーラムの運営と、地域での取り組みとの有機的な連携のあり方 	7. 地域の中で、NPOと行政と企業の連携をどうつなぐか	NPO 碧いびわ湖	第4回
3	琵琶湖を愛する思いを抱くことが、あるべき姿を実現する行動につながり、ひいては、つながりを広めていくことで課題を共有することの重要性を実感していること。	関心のない人々に対して琵琶湖の現状や保全の取り組みを知ってもらい、関心を抱いてもらうこと。	琵琶湖を保全することが、自分たちにとって、日常生活レベルでどのように目に見えるメリットがあるかということ。	5. 若い私たちの環境への思い	滋賀大学 浜川小学校 びわっこ大使	第5回

8章 1 協働の視点に基づく参画・実践・交流

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
1	ボランティアGの連携(活動の発表・報告の場づくり)	<ul style="list-style-type: none"> ・これに向けた、あらゆる機会を通じての教育・啓蒙と共に、改善に向けた活動が必要。 ・ボランティアに活動の主体をお願いするのであれば、これに対する助成と共に、一般への活動認知のための行政や地域企業のバックアップが必要。 		2. 源流管理で環境いきいき琵琶湖!	白鳥川の景観を良くする会	第4回
2	環境教育の実施。 “びわこの日”を中心とした県内各地での清掃活動。各種プロジェクトの実施。 またその指標の整理・発信。	自然に対する意識付けを考慮した環境教育の実施。 市民参加を率いるリーダーの育成。 琵琶湖を有する滋賀県サイドからだけでなく、京都・大阪から見た“びわこ”についての情報共有。さらに連携の強化。	琵琶湖は下流域に重要な役割を果たしているだけでなく、下流域の治水や水利用が、琵琶湖のあり方にも影響を与えていること、具体的事例や取り組み、施策等の記載がもっとあってもいいのではないかと。	3. 琵琶湖を支える市民参加とは	新江州(株)循環型社会システム研究所	第4回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわコミ会議
3		<ul style="list-style-type: none"> ・飲み水、生き物、食べ物、災害などで上下流(流域)は繋がっているが、そのことに気づく仕掛けがない。 ・特に琵琶湖の課題が、下流域域に知られていない。課題を伝え合うツールがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・「琵琶湖淀川流域の取り組み(p.50)」に「市民団体等」との連携強化の記載が必要 例:「琵琶湖・淀川流域圏再生推進協議会」と同様に民間団体で構成される「琵琶湖・淀川流域圏連携交流会」や「淀川管内河川レンジャー」の活用を記載 例:「琵琶湖淀川流域で開催される、琵琶湖を知ってもらう活動に対する取り組みの充実」を記載 ・記載事項にない、新たな考え方として記載 ※飲み水、生き物、食べ物、災害などで上下流(流域)は繋がっているが、そのことに気づく仕掛けがない。特に琵琶湖の課題が、下流域域に知られていない。課題を伝え、その解決に上下流の市民団体、個人が取り組みことで、課題が宝物に変わるようになる。そのような企画に取り組む必要がある。 	6. 琵琶湖・淀川水系での上流と下流がつながるには？	NPO法人 蒲生野考現倶楽部 琵琶湖・淀川流域圏連携交流会	第4回
4	<ul style="list-style-type: none"> ・県、市、地域住民の連携による異常繁殖した外来水草の除去活動(特に守山市) 	<ul style="list-style-type: none"> ・除去を行う人員不足について 各市に様々な団体があるが、高齢化の問題が顕著に現れている。特に影響を受けている漁業関係者も高齢化しており、定期的な除去活動を行うことが大きな負担となっている。 ・新規団体の特定外来水草の除去活動を行うことの難しさ 許可や処理方法等により新規団体が入りにくい。実行に移しにくい。サポート体制を整える必要がある。 ・環境学習としての地域住民との関わり方 オオバナミズキンバイの除去活動では高校生や留学生在が参加していることがあるが、そこで地域環境団体や漁業関係者から、困っている現状や活動について生の声として聞くことによって、とても良い体験ができたと答えてくれる人が多い。こういった体験をさらに多くの児童、生徒にしてもらいたいと考えている。 		1. 学生とともに考える。～びわ湖の新たな脅威と未来～	NPO法人 国際ボランティア学生協会	第5回
5		<ul style="list-style-type: none"> ・「近い水」のある暮らし再生プロジェクトや琵琶湖の生き物にぎわい再生プロジェクトの課題と成果などをわかり易く発信することで、下流域の人にももっと関心を持ってもらうことが必要(例:琵琶湖博物館は他府県の人には知名度は低い) 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を伝え、その解決に上下流の市民団体、個人が取り組みことで、課題が宝物に変わるようになる。そのような企画に取り組む必要がある。 	3. つながるための方法を考えよう ～市民レベルでどうつながるか～	NPO法人こどもアート (琵琶湖・淀川流域圏連携交流会)	第5回
6	びわコミ会議の開催	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO(市民団体)の担い手の若返りのための施策 例)NPOの活動の事業化(継続的な雇用の実現) 企業内ボランティアの育成(現役時代からの市民活動への参画) NPOと企業のコーディネートにおける学生の活動支援と地域貢献人材の雇用創出 	NPOや市民活動を継承する担い手の育成(NPO活動の事業化、企業内ボランティアの育成、協働のコーディネート活動の促進、学生の活動支援、地域貢献人材の雇用創出等)	4. 団体・企業・行政でつながりあって、それぞれの課題をプラスに転換!	くらシフト工房 滋賀県琵琶湖環境部	第5回
7		<ul style="list-style-type: none"> ・行政が行っている生態系再生・保全の取り組みと民間・自治会等が行っている環境保全活動とのリンク(各個人が持っている環境再生保全に対する思いを生かす仕組み)が不十分 		6. 生き物に配慮した川づくり～行政と地域社会、NPO等との連携～	古橋のオオサンショウウオを守る会 滋賀県長浜土木事務所木之本支所	第5回
8	(完全ではないが)釣った外来魚はリリースしないということ	<ul style="list-style-type: none"> ・こういった環境学習やセミナー、環境講座などの場への参加について、一部の意識の高い方々の積極的な参加は見られる。しかし、それでは意識の高い方の意識がより高まるだけで、意識の低い人や今まで参加しなかった方につまでも参加してもらえないという点。 ・そういったどちらかといえば意識の低い方に参加してもらうように、開催方法などに工夫が必要であると感じた。 		7. 外来魚を減らす取り組みの進捗点検とアイデア出し	滋賀県立大学環境科学部	第5回

No.	すでにできていること	実現に向けた課題	十分記載されていないこと	グループテーマ	担当団体	びわこ会議
9	県内への情報発信:情報発信ポータルサイトの運用 等 県外への情報発信:なし	県内への発信も必要ですが、いかに県外(特に関西圏)の人に、びわ湖を自分のこととして考えてもらうきっかけを作っていくかが課題です。楽しそう、驚き、共感等、びわ湖を身近に感じてもらう切り口を工夫する必要があると考えます。 (観光誘致としてのびわ湖ではなく、命の水としてのびわ湖を伝えたい)		14. 情報発信でつながるびわ湖と市民	新江州(株) 循環型社会システム 研究所	第5回
10	うみのこを使った体験活動で滋賀や一部琵琶湖周辺地域の小学校や子どもたちに対し、琵琶湖に親しみ、遊びながら、琵琶湖の生態系を学ぶ活動で市民とのつながりができていること	滋賀県以外の近隣地域の小学生や親子に対し、これまで以上に広く「うみのこ」を利用した体験活動を通じた教育。そのためには、周辺地域小学生用の「うみのこ」をもう一隻行政で予算とれないか。	少子高齢化や人口減の現状での市民とのつながり方	4. あなたは何で琵琶湖を感じますか？	NPO法人こども アート (琵琶湖・淀川流域連携交流会)	第6回
11	・マザーレイクフォーラムの中で地域連携WGを立ち上げ関係者で連携のための議論や企業への働きかけ(CSRセミナーの開催)、今後の連携のための活動内容についておおよそ共有できている。 ・連携の当事者になる団体と連携を仲介するコーディネーターが顔の見える関係でネットワークができている。 ・連携によって課題を解決したいという主体を具体的に把握している。	情報収集や連携の事例づくりをするための人手不足		7. 新たな連携の糸口を探す	滋賀県立大学	第6回